

奈良時代の燃えさしについて

浦 蓉子（奈良文化財研究所）

1. はじめに

平城宮や平城京の溝や柱抜取穴からは、割り裂いたままの棒状で一端あるいは両端が燃えた木製品が多数出土する（註1）。これらは「燃えさし」と名付けられているが、これまでに図化して示した事例は少ない。そこで、2013年度におこなった平城第524次調査で出土した燃えさしについて、残りの良いものを中心に図化し、樹種同定をおこなった。本稿ではこれらの成果を報告の報告を中心に若干の考察を加え、平城宮・京から出土する燃えさしについての評価をおこないたい。

平城第524次調査では、素掘りの東西溝SD10580の木屑層より木製品が多量に出土しており、今回報告する燃えさしもすべて東西溝SD10580の遺物である。これらの木屑層から出土した木製品は共伴する土器や木簡から8世紀第2四半期の年代を与えることができる。また「首皇子に関わる官司の活動がうかがえる木簡がまとまった数量出土」していることや、「漆が付着した須恵器平瓶や挽物を製作した際に生じた残材」が出土していることから、「皇太子に関わる官司の存在」と「木工に関わる工房が併設されていた可能性」が指摘されている（奈文研編2015）。

2. 燃えさしの名称について

先端が炭化している棒状品についてはこれまでも各地の遺跡から出土しその分類が試みられている。これらの棒状品は、民具資料との比較から「付け木」として認定され、火種をカマドや灯明などに移す際の着火具として火付け、火移しの用途が想定されている。その特徴としては、棒状品の先端部のみが焼け、先端部が斜め方向にカットされる等が挙げられている。また、これらの棒状品は不整形であることから、他の木製品の製作時に生じた端材によって製作されたと想定している（註2）。平城宮で出土した燃えさしについては、「割り裂いたままで」「一端あるいは両端が燃えたものが多く」、「棒状や板状等様々な形態のものがあることから、ツケ木として専用につくられたものではなく、廃材などを利用して」としている（註3）（『学報84』）。前者は用途について民具とのつながりを重視して「付け木」と呼称するのに対し、後者は絵図などに見られるヒノキやスギなどの薄板の一端に硫黄を塗布した、いわゆる定型化した「付け木」との相違に重点をおく。本稿では後者の立場に立って「燃えさし」と呼称し、用途は火付け、火移しを想定する。

3. 出土した燃えさし

燃えさしの認定は、先端部のみが炭化していること、炭化している先端部と反対の端部に断ち切った痕跡（明瞭な加工痕）が確認できることの2点を軸としておこなった。すなわち、溝や土坑などで廃棄された木製品が二次的に火を受けたものではなく、意図して棒状品の片端に火がつけられたものを燃えさしとして認定した。

図1-1は長25.2cm、幅2.1cm、厚0.9cmで割裂材。各面は調整した痕跡はなく、割り裂いたままである。先端のみ炭化している。先端部付近は節の影響を受けて変形している。年輪の詰まった材を利用している。ヒノキ（註4）。2は長16.0cm、幅1.5cm、厚0.7cmで割裂材。ヒノキ。3は長16.2cm、幅2.2cm、厚1.1cmで割裂材。ヒノキ。4は長13.1cm、幅2.5cm、厚0.9cmで割裂材。下端部には節が含まれており、節のゆがみを受けて曲がった形状を取る。炭化部は部分的に刃物で削り取られたよう

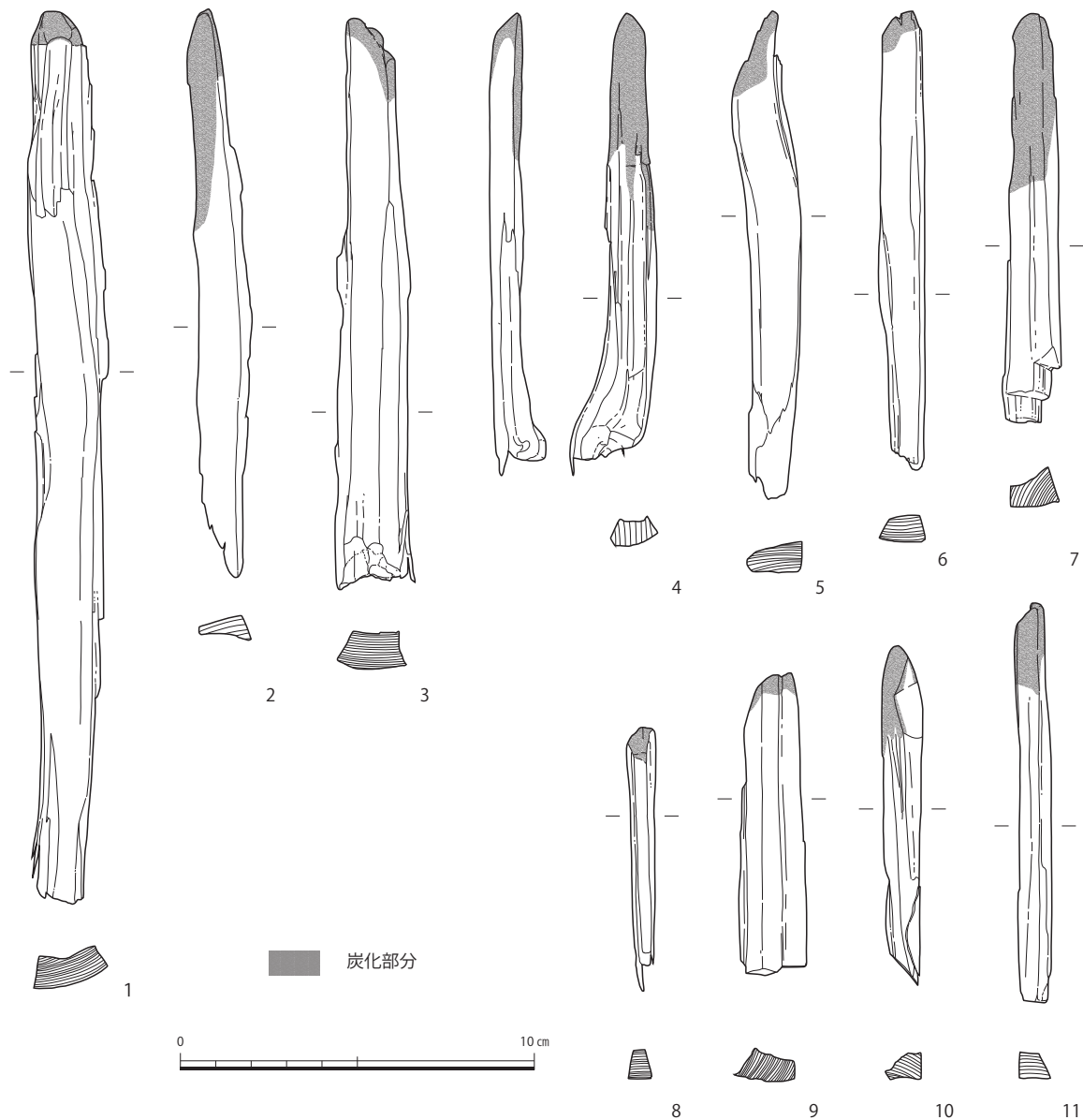


図1 東西溝 SD10580 木屑層出土燃えさし

に見える。ヒノキ。5は長13.8 cm、幅2.0 cm、厚0.9 cmで割裂材。上端部は炭化している。また節の影響を受けて変形している。ヒノキ。6は長13.0 cm、幅1.3 cm、厚0.8 cmで割裂材。年輪の詰まった材を利用している。ヒノキ。7は長11.6 cm、幅1.7 cm、厚1.1 cmで割裂材。下端部に明瞭な切断痕跡が残る。ヒノキ。8は長7.5 cm、幅0.9 cm、厚0.8 cmで割裂材。一側面には刃物で調整した痕跡が残る。ヒノキ。9は長8.6 cm、幅1.9 cm、厚1.0 cmで割裂材。年輪の詰まった材を利用し、下端部に明瞭な切断痕跡が残る。ヒノキ。10は長9.6 cm、幅1.2 cm、厚0.8 cmで割裂材。先端の炭化部分が部分的に刃物で削り取られたように見える。下端部は斜めに切断されている。ヒノキ。11は長11.2 cm、幅1.0 cm、厚0.8 cmで割裂材。下端部は明瞭に切断されている。ヒノキ。

4. 燃えさしの評価

今回図化をおこなった東西溝 SD10580 の燃えさしは年輪が詰まった材を用いており、すべて割裂材である。そして樹種は平城宮・京で使用頻度の高いヒノキである。そのため、これらはこれまでに

も指摘されてきたように他の木製品の製作時の端材や廃材等の材が用いられたと考えられる。また、これらの燃えさしには1や4、5のように節部分や、節の周辺のゆがんだ部分などが用いられている。平城宮・京から出土する曲物等の木製品にはこのような部分は用いられない。これら木材の利用部分の傾向の違いも含め、製品としては使えない・使わない部分、もしくは廃材を燃えさしにしたと考えられる。

燃えさしには、長いものと短いものがある。短い燃えさしを個々に製作したと考えるよりは、平城宮内裏北方官衙地区の土坑から出土した燃えさしにヒノキの小割り(長さ30～40cm、太さ2～3cm角)が多い(『平城宮発掘調査報告Ⅶ』)ことから、短いものは長い燃えさしを火付けや火移しで使用した後に燃えた部分を切り落としたものとも考えることもできる。また、使用した部分を切り落とし、再度火付けや火移しで使用することでも短くなっていくと考えられる。今回報告をおこなった燃えさしは奈良時代前半の宮外のものであるが、宮内の燃えさしの状況と良く似る。

また樹種がヒノキであることや、製品には避けられる節の部分が残ることから木製品や建築部材の端材や廃材を利用していたという特徴が認められた。一方で、平城宮跡の建築部材の樹種の調査によると、平城宮内から出土した建築部材150点のうち、ヒノキが91例、コウヤマキが53例報告されている(伊東、島地1979)。現在までに、コウヤマキ製の燃えさしは確認されていないことから、いくつかの場合が想定できる。1)燃えさしの樹種同定件数が少ないため、樹種同定結果にコウヤマキが現れていない。2)コウヤマキの建築廃材も利用するが、燃えさしに適した樹種ではないため利用しない(あるいは、コウヤマキの建築廃材は利用しない)。3)建築廃材ではなく、平城宮に持ち込まれたヒノキ材を割り裂いて燃えさしを製作する。4)「燃えさし」として割り裂いた棒状品が平城宮・京に持ち込まれる。などが考えられ、燃えさしにとどまらず、平城宮・京の木材利用を考える上でも非常に重要な視点である。

5. おわりに

以上、平城第524次調査の東西溝SD10580から出土した燃えさしの報告を中心に考察をおこなった。まだ、法量や樹種などを示す資料が少ないため、順次資料化を行っていきたい。燃えさしは、火付け、火移しとして、短時間や一時的な使用が想定できるが、今後、燃焼実験を通じて燃焼時間の想定もおこなっていきたい。

註

註1 例を挙げると、平城宮第一次大極殿院の西楼の掘立柱抜取穴からは約700点、平城宮第一次大極殿院の西側を南北に流れる基幹排水路SD3825からは約800点、第一次大極殿西辺整地土下層木屑層・炭層からは約100点が出土している(『学報84/平城宮発掘調査報告XⅦ』2011)。また、平城宮推定大膳式の土坑からは、「たきぎ」と呼ばれる木材を細く縦割りしたものが出土している。「ほぼ方2cm、長さ30cm～40cmほどのもので、方0.6cm、長さ15cm程度の割り屑ともいべきものも含まれているが、比較的大きさが均一なものが多い。半数以上は焼けこげた痕跡があり、おそらく燃料としたものであったと考えられる。(中略)2本のスギ材と1本のマキ材のほかはすべてヒノキ材である。ヒノキの年輪は脈が大きく間隔が密で、原料はかなり太肩かったと推定される。あるいは建築廃材をわたったものであろう。」『平城宮発掘調査報告Ⅱ』とみえる。「燃えさし」と同じものを指していると考えられる。

註2 砺波市教育委員会 2014, 大丹保遺跡発掘調査報告』, 藤田慎一 2019「砺波市大丹保遺跡・増山遺跡出土の
付け木について」『学術財研究』第1集『学術財研究』編集事務局

註3 前掲註1

註4 本稿における燃えさしの樹種は(株)パレオ・ラボの小林克也氏の同定による。

参考文献

伊東隆夫、島地, 謙 1979「古代における建造物柱材の使用樹種」『木材研究資料(1979)』14、49-76

浦蓉子 2020「平城京出土の燃えさし —平城第524次」『紀要2020』、182-183

奈良国立文化財研究所編 1962『平城宮発掘調査報告Ⅱ—官衙地区の調査—(学報第15冊)』

奈良国立文化財研究所編 1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ(学報第26冊)』

奈良文化財研究所編 2011『平城宮発掘調査報告XⅦ(学報第84冊)』

奈良文化財研究所編 2015『紀要2015』